

謹
呈

広 島 県

津久江 一 郎

臨床精神医学 第38巻 第3号 別刷

アークメディア

著者

シリーズ☆日本精神医学新風土記(25)

広島県

津久江 一郎

1 はじめに

当企画が表題にある“新”風土記であるから、当然前回のものに比べて新しい記録を付け加えることになる。また、限られた紙数でしたためるので、限られた“記”とならざるを得ない。加えて、多くの資料の中での選択となり、すべてを見渡す力のない浅学の身なれば、なおさら偏ったものになったという危惧は拭えない。

その辺りのことをご容赦いただいて、主として明治以降の広島県における一つの大きな流れができつつあることを紹介して表題にせまることにした。

2 郷土の二人の偉大な先達

わが郷土に2つの誇るべき顯彰碑がある。

1つは呉秀三先生のであり、もう1つは富士川游先生を顕彰したものである。

両先生とも、わが国の近代医学の黎明期をリードした精神医学の泰斗である。

この偉大な先達は偶然にも、同じ年(1865年)に誕生されている。

呉先生(1865～1932年)の胸像(写真1)は第32回広島医学会総会(昭和54年11月11日)の記念事業として挙行されて、県医師会館ロビーに



写真 1

安置されている。富士川先生(1865～1940年)の顕彰碑(写真2)は昭和50年8月に広島大学医学部構内に広大医学部創立30周年記念事業として建立されている。

1. 呉秀三先生について

呉先生は、元治2（1865）年3月14日に生まれ、父、呉黄石、祖父山田黄石（浅野長容候の侍医・蘭方医）はともに呉生まれである。

呉先生については、岡田靖雄著「呉秀三その生涯と業績」(思文閣、昭和57年)に詳述されているが、郷土と同じくする筆者にとってはまた



写真2

特別の感慨を持つ。

先生の父呉黄石は呉(市)の名門沢原家(広島県安芸郡莊山村大庄家)の直系(秀三先生の曾祖母は沢原登代)である。また、現在の豊田家とも繋がっているという因縁がある。これら素封家の中で医を学んだのは祖父の山田黄石からであった。

つまり、呉秀三の祖先の出身地はその昔、莊山田(しょうやまだ)村近辺一体を呉(浦)と称しており、明治になり、軍港として、呉鎮守府ができ、呉市となり発展、繁栄していった。

また、呉先生の出生は東京であるが、幼時は郷土浅野支藩吉田町で過ごされている。東京帝国大学医学部を明治23年に卒業後、精神病学研究のため文部大臣より命じられ3年間ドイツに留学、明治33年に医学博士(第52号)を授けられているが、この時の学位論文はドイツ文で「神経病者の自殺並に自殺企図」というもので、今日に通じる因縁を感じる。

明治34年、東京帝国大学教授となり、明治37年、東京巢鴨病院長(後の東京都立松沢病院)、正確には五代目院長(明治37年10月～大正14年6月)という赫々(かっかく)たる経歴と業績はあまりにも有名である。

なかでも、東京医学誌第32巻10～13号(大正7(1918)年5～7月)に投稿された「精神病者私宅監置の実況および其統計的觀察」に明治33年精神病者監護法について録してある。その中

に、有名なわが国の精神障害者はこの病を受けた不幸に加えこのようないわが国に生まれたという「二重の不幸」という精神障害者の現状を改善しようと思うあまりの正義感と反骨精神より私の意見を提議され、精神病者監護法の抜本改革を求め、「精神病院法」制定を目指されたのである。

また、先生はすでに西欧諸国の司法精神障害者の特別な法制度と専門治療施設を見て、わが国においても精神病院を整備し開放的な医療を進めていくためには、司法精神障害者のための処遇制度・施設の整備の必要性についても指摘されておられたが、残念ながら百年近くも放置され、大きく諸外国に遅れをとることになった。

一部に先生を評して、無口で冷たい、偉大過ぎて近寄り難いとかいう批評もあるが、障害者に接する態度は常に優しく、慈愛に満ちたものであったという。かくして精神病院法案は、1919年～23年の3段階で施行された。ようやく国が動いたのである。これにより精神障害対策は監護から医療へという公共的責任の考えが一応表明された。先生はさらに患者の処遇改善を提唱し、作業療法を初めて推進されたのはあまりにも有名な話となっている。しかし、この精神病院法の運用実態については、先生にとって決して満足のいくものではなかったらしい。

2. 富士川游先生について

一方、富士川先生は、慶應元(1865)年5月11日安芸国沼田郡安村字長楽寺(後に明治31(1898)年安佐郡となり今日は広島市と合併)に父富士川雪(すぐ), 母タネ(可部町の医師岡田立石の娘)の長男としてお生まれになっておられる。長楽寺村は、いわゆる“安芸門徒”と称され浄土真宗の盛んな地であり、信仰に裏打ちされた医師の子という環境の中で育ち、後年、医学・文化の向上に大きな足跡を残された。

16歳の時、郷里沼田を出て、広島県病院附属医学校(明治2年私学浅野藩学問所・修道館内医学所として始まり、後に広島県医学校と改称されたが明治21年廃校となる。)に入學し22歳

(明治20年)で卒業し、その年の秋に上京されたが、特定の師を求めず、社会に出てからは生命保険医になり、傍ら中外医事新報社という私的畠を生涯歩み続けられている。こうしたお二人の先達の経歴はあくまでも対象的に生涯を通して、片や官、片や民という立場を貫かれた。

ところが、両先生は明治20年の富士川游先生が上京された頃より出会い、親しく交わられ意気投合し、肝胆相照らした盟友となり、郷土の学問、医道の発展、高揚のため生涯をかけて尽力されたのである。しかも、中央で日夜活躍される傍ら、郷土のことについても心を碎き、明治29年には「芸備医学会(初代会長呉秀三)」をお二人が中心となり創立された。

3. 芸備医学会と「芸備医事」誌など

この機関誌「芸備医事」誌を発刊し、同誌は明治・大正・昭和の三代にわたり47年間欠けることなく続けられ、これが世に知れわたり広島の医学水準は地方有数の高い位置に引き上げられたと伝えられている。その他、両先生による共同作業、著作もかなり存在するが、「芸備医事」誌については、広島大学精神神経医学教室の図書室の奥にきちんと収納されており、入局当時、ときに興味深く瞥見したことがある。

特に、富士川先生は明治37(1904)年、37歳時に“日本医学史”を出版された。これにより、日本の医学史ははじめて確立された。ご承知のごとく、わが国は明治に入ってより欧米からの自由主義の吸収、新技術を体得し、前進一途の時代であり、政治・経済・教育等すべての面でいわゆる「文明開化」したが、こうしたときがあり、富士川先生は如何に医学技術が進歩しても「医道の確立」がなされなければ十分ではなく、そのためには医学史の重要性をいち早く認識され、自ら取り組まれて「韓医方」「唐医方」輸入の時代から「蘭医学」に始まる西洋医学を輸入消化し、発展した段階を膨大な全国各地より涉猟した資料の中から極めて明確に整理編述され、日本の医事発達の歴史が実証的に詳述されたのである。

この一書の刊行によって長年の努力と正確な歴史(医学史)に対する情熱は国内だけでなく、諸外国からも注目され、「日本の富士川」と高く評価された。学士院賞第3号を47歳で、大正3年にはこの業績に対して文学博士、後の大正4年には医学博士の学位を授与されたが、決して先生が自ら進んで求め得られたものではなかったという。

なお、昭和2(1927)年に富士川先生の主唱で日本医史学会を創立されているが、理事長は呉先生であった。

呉先生は昭和7(1932)年3月26日に67歳で逝去されたが、この時は富士川先生が「芸備医事」誌428号に呉先生の追悼文を寄せておられる。その後、「芸備医事」誌は太平洋戦争の深刻化に伴い、用紙の統制、制限が厳しく政府の方針によってやむなく昭和17年12月555号で廃刊された。戦後になってようやく、昭和25年「広島医学会」が創立され、その機関誌「広島医学」により芸備医学会の伝統と精神が受け継がれたのである。

つまり、両先生とも郷里は広島であったが、活躍されたのは主に東京を中心としたものであった。また、明治29年に相計って先哲をあがめ忘れず、シーボルト生誕百年の行事を挙げられている。

また特筆すべきは、富士川先生は石井正人先生(現養神館病院理事長 石井和彦先生の祖父)等と広島県における精神衛生を普及啓蒙するべく中心となって昭和7年に「養神協会」を設立され、その活動が始まっている。特に富士川先生は徹頭徹尾、野に止まって他の大いなる力を籠(か)りずに、明治、大正、昭和を通じてわが国の文化興隆の一原動力となられ、ことに精神文化の高揚に偉大な足跡を残され、昭和15年11月6日鎌倉の自宅で75歳で逝去されたのである。

表 広島県精神保健福祉協会の変遷

・昭和 7 年	富士川游先生中心となり養神協会設立
・昭和 25 年 4 月	小沼十寸穂教授が理事長となり精神衛生協会として再興
・昭和 28 年 7 月	広島精神病院協会が分離独立（9 病院）。
・昭和 33 年 4 月	一時解散し、精神病院協会が精神衛生部を設置して、事業を継承した。
・昭和 36 年 11 月	広島精神衛生協会を再建し、久保撰二先生（第一病院）が会長に就任。事務局は広島大学医学部神経精神医学教室を連絡室とした。後に県精神衛生相談所に移る。機関誌「広島精神衛生」の発行や、精神衛生講習会の開催等の活動を行う。
・昭和 41 年 10 月	第 17 回全国精神衛生大会が広島市において開催されることとなり、より強力な会となるべく発展的解散をする。
・昭和 44 年 10 月	全国大会を開催するにあたり事務局は県衛生部予防課に設置。広島県精神衛生協会を設立。初代会長は財界より県公安委員長白井市郎氏。 第 17 回精神衛生全国大会を開催し、高松宮殿下がご出席される。
・昭和 45 年	機関誌「精神衛生創刊号」発刊する。
・昭和 47 年	二代目会長は元厚生事務次官安田巖氏就任。
・昭和 63 年 3 月	社団法人設立
・平成元年 6 月	三代目会長は元広島県精神病院協会長の松田鎮雄氏就任、副会長は更井啓介氏・下村 薫氏（日本钢管福山病院長）・津久江一郎（県精神病院協会長）
・平成 2 年 4 月	社団法人広島県精神保健協会に名称変更
・平成 9 年 6 月	四代目会長はマツダ病院名誉院長の井田憲明氏就任。
・平成 15 年 5 月	社団法人広島県精神保健福祉協会に名称変更
・平成 15 年 6 月	五代目会長は広島大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経医科学の山脇成人教授就任。

3 広島県における精神保健対策

昭和13年に厚生省が設置されたが、戦時中、精神保健対策は全く顧みる余裕はなかったようである。

昭和20（1945）年8月15日戦争の終結をみたが、ようやく昭和22（1947）年日本医師会、昭和24（1949）年日本精神病院協会の設立をみている。こうした中で、昭和25（1950）年“精神衛生法”が公布され、精神病者監護法、精神病院法は廃止となっている。

戦後となり偶然にも富士川先生（講師時代）の弟子である慶應義塾大学卒業の小沼十寸穂先生（広島市に出生し、秋田県出身）が昭和24年7月に広島県立医科大学に赴任された。小沼教授は着任して早々、昭和25年4月30日戦争のため

一時中断されていた「養神協会（前述）」を「精神衛生協会」として再興された。こうして研究、教鞭をとる傍ら、恩師富士川先生の意志を継がれたのである。理事長に小沼教授、事務局は広島医科大学精神神経教室に置いて、協会誌の発行、精神衛生叢書の出版、講演会や講習会、座談会の開催等を積極的に行っておられる。

当県の精神衛生協会は小沼教授の率先によって再興したが、その後幾度か消長があり現在に至っているので、表にしてまとめた。

4 広島大学医学部神経精神医学教室の歩み

1. 初代教授小沼十寸穂先生就任

昭和32年4月広島県立医科大学の国立移管に伴い、広島大学医学部神経精神医学教室（現：精神神経医科学）の歩みが始まった。



図1

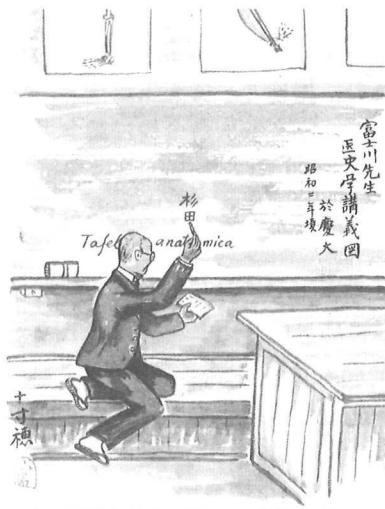


図2

小沼先生は昭和33年にスウェーデンのカロリンスカ大学に文部省在外研究員として留学を終えて帰国されたが、ご専門は精神分析学を始めとして、原爆後遺症、産業精神医学・精神衛生学的研究、小児精神医学、頭部外傷後遺症、アルコール依存症、司法精神医学等多岐にわたっており、そのいずれも超一流の域にあられ、第一線で活躍しておられた。そのすべてが自らの臨床に基づく自説であり、著者は「ヒステリー心因論」(光宣堂、昭和23年)を始めとして、「アルコール中毒」(金原出版、昭和36年)、「精神神経科のポリクリ診療録」(南山堂、昭和36年)、「精神鑑定」(南江堂、昭和46年)、「産業神経症物語」(労働科学研究所出版部、昭和59年)等多数あるが、いずれの分野でも高く評価されておられる。しかも師は先哲を忘れず、自らを自戒し決して驕らず、臨床を重んじた人格者の育成を念じて指導され、品川洗三(昭和28年卒)、武村一郎(昭和32年卒)、石津宏(昭和39年卒)の各教授を始めとして、多くの優秀な弟子を育てられた。

いくたの学会を主催、発表されているが、そのハイライトになったと思われるものを2、3

披瀝してこれに替える。

①第62回日本精神神経学会

昭和40年4月、先生は世界最初の原爆被爆の爆心地である広島市平和記念公園内の会場で第62回日本精神神経学会総会を会長として開催されたが、参加者は2,000人を越えるものであった。日本精神神経学会の創設者の一人であられた呉先生ゆかりの地で、しかもちょうど小沼先生の開講15周年と呉秀三博士生誕百周年記念が重なったため両方合わせて学会的行事がこの総会に委ねられた。

記念講演はつながりのある岡山大学名誉教授林道倫先生による「日本精神医学の回顧と展望」であった。記念祝賀会は会長招宴として行われた。会場には呉先生ご長男のローマ日本館長呉茂一氏よりの礼状とご令孫、富士川先生のご令孫夫婦はお子さん連れで参会された。また、日本医師会長武見太郎(小沼十寸穂先生と大学の同級生)先生の祝辞も披露された。同時に呉秀三博士並びに富士川游博士の書著、遺墨、その他を学会場に展示し、斯界先哲を回顧する絶好の機会となり、時宣を得たものであった。

小沼教授は富士川先生の学生時代に受けた講

義を想起して、またもう1つは呉先生と偶然に学生時代通学中に省線電車内で出会われたのを想い出され、墨絵として先生が描き、これを絵葉書として、学会参加者全員に記念品として配布された。(富士川先生の講義は巻紙に墨で書かれた原稿でゆうゆうと話されたという。) (図1, 2)

また、外人講師に対しての感謝状授与の介添役にはミス広島の起用とか、エクスカーションには宇品港より自衛艦“まき”的出動をお願いしてこれに乗船してクルージングし、江田島、宮島の観光をして“千畳閣”にて親睦会を催す意表を突く豪華な出し物も用意し参加者を喜ばせた。

②日本アルコール医学会および第28回・29回国際アルコール学会について

昭和41年(1966) 5月31日京都で“第1回日本アルコール医学会”が開催された。この学会の発起人の一人として小沼先生は会の創立に尽力された。会長は小片重男教授、小沼教授は特別講演を引き受け、会は盛大に成功裏に終わった。この会は現在、日本アルコール・薬物医学会、日本アルコール精神医学会、日本嗜癖行動学会、日本アルコール関連問題学会の4つの学会に分かれそれぞれ発展している。

日本アルコール医学会設立略史によると、議事にM.keller, S.D.Bacon, E.C.Hoff, R.Foxなどが名誉会員に推薦されているが、その後、小沼先生は国際アルコール学会に出席され、親交するきっかけとなった。なお、この学会の発会式には、後に当院にも来訪されたICAA (International Council on Alcohol and Alcoholism)の理事長アーチャー・タング(Archer Tongue)氏より祝文を頂戴している。

その後1968年ワシントンD.Cで行われた第28回国際アルコール学会に小沼教授は招聘され自説を発表された。この学会に日本人医師としては初めての出席であると、先生がフェアウェルパーティの晴れの壇上で、突然副会長に任命された。間髪を入れず、堂々と挨拶され

たのは圧巻であった。

筆者もまたとないチャンスとして随行させていただいたが、これが初めての国際学会発表となつたし、これをきっかけとして後にラトガーズ大学マーク・ケラー博士の秀作「アルコール辞典」(診断と治療社 第1版、昭和54年)を、改定第2版(昭和62年)を翻訳出版することとなった。この訳本の訳者跋として「謹んで恩師小沼十寸穂広島大学名誉教授の傘寿を祝し、本書を捧げる」とある。

なお、余分であるが、これらに対して昭和59年に日本医師会最高優功賞を頂戴したのは、一つに京都府立医科大学名誉教授で、東京都立松沢病院長(第13代院長 昭和58年9月～平成2年9月)の加藤伸勝先生による名監修のお陰があったからこそと感謝している。1970年に第29回ICAAシドニー大会にも続けて先生に同行し、発表させていただいたのは懐かしい想い出となっている。

関西の明星と字(あざな)された小沼先生は21年間の教授職を終えられ昭和45年3月に退官され名誉教授となられた。

先生は学問はもちろんのこと、文才、画才、彫刻等秀でておられた。しかし、学問がおろそかになるからとて、常に自戒しておられた。退官されてもなお鑠として、94歳で天寿を全うされるまで横浜の自宅で過ごされ、多くの弟子達を温かく見守っていただいた。筆者とは“翰交”と称されて「書翰での交誼にしたい」と、今でも先生からいただいた書翰はすべて大切に保存しており、筆者にとって貴重な遺品となっている。お宅に訪ねさせていただいたのはわずか数回に過ぎなかったが、最後に伺った時、お宅には開講18周年記念教室展覧会の時に出品された厳島神社にて入手された材にて“双々居”(居て居ず、居ずして居る：弟子を慈愛の眼で見ながら自立を促すの意)と戸口に刻され掲げてあったのがいまだに脳裏に焼きついている。

2. 第2代、教授更井啓介先生について

ご専門は躁うつ病であったが、先生のご在任

(昭和45年5月1日～平成元年12月31日)中はちょうど全国で学園紛争が吹き荒れた渦中の20年間であったのは大変惜しまれる。その苦衷をなめられたのは無論広島だけでなく、その渦の中に精神医学的葛藤が蔓延ったのである。それにもかかわらず、常に明るく天真爛漫で全方位的に振舞われた。先生はつねづね精神科医療というものはPsycho-medico-social careでなければいけないと諭されていたのを、今もって銘記している。それ故に一つの困難な時期にあっても、第75回日本精神神経学会(昭和54(1979)年5月)および第18回日本神経精神薬理学会(昭和63(1988)年9月)等を大会長として成功されたのは大変な苦労があったと思う。著書として「躁うつ病の治療と予後(精神科MOOK No.13)」等、その他多くの学会発表・論文を出されている。詳しくは教室開講40周年ならびに更井教授就任20年を記念して業績集が出版されているのでこれに譲るが、この発刊に際して「臨床に従事しながら研究する者にとっては次第にままならぬ状態になって来つつあり」と始まり、「文部省は講座研究費を全く増額せず、人権と動物権の尊重は実験をやりにくくさせ、告発の危険性をはらんでいる」とある。

こうした現状に失望し、研究室より去った多くの有意な先生方が野に下ったのは残念なことではあったが、そのことでかえって行政畠で手腕を振るい能吏となったり、クリニックとして真の町の医者として大変有用な診療所を開設して成功された多くの先生方がおられる。

・広島県精神神経科診療所協会について

特に小沼教授が門下生の中で最も信頼された高弟のお一人で、早くより広島市中心部でクリニックを開業された赤松和彦先生(県立広島医専第一回生)を中心にして優秀な方々が広島県精神神経科診療所協会(以下、広精診と略記)を組織された。野に下った高畠長吉(昭和33年卒)、木村進匡先生(昭和37年卒)、日域昭三先生(昭和38年卒)等がこれに加わり、これら先生方が主として広島の中心部で開業されており

立派に活動されている。広精診は現在の会員数が60施設となり、比較的郊外にある精神科病院と有機的緊密に連携しながら今日に至っている。その証として、私立精神病院と診療所の開設者で構成されている“広島市精神科医会”は毎月1回の例会で継続されており、病診連携が有效地に機能している。

また県・市の医師会で活躍された天野友直(昭和26年慶大卒)先生をはじめ、厚生労働省では今田寛陸先生、また県立広島病院医長、クリニックを開業後、県の元精神保健福祉センター長となられた河村隆弘先生、英国に留学し、精神分析の研鑽を積まれた後、現広島市精神保健福祉センター長になられた衣笠隆幸先生等は出色である。

更井教授はやむを得ぬ事情が突発し、任期を残して退官された。69歳(平成10年8月15日)で没せられたのは誠に惜しい。

3. 第3代、教授山脇成人先生について

山脇(昭和29年1月15日生)先生が「悪性症候部の病態と治療に関する研究」厚労省主任研究者(昭和61～63年)として一躍脚光を浴び、平成2年より若干36歳という若さで就任された。専門は神経精神薬理学のみならず、若くして海外に目を向けられ、その活躍は著しい。臨床家としても一流で、サイコオンコロジー、感情障害(特にうつ病)、早くから他科との陪診、リエゾン精神医学などに取り組まれ名を成しておられる。

山脇教授との出会いは、教授が医学生時代に前述のマークケラー著「アルコール辞典」の翻訳を手伝ってもらったことに始まる。1978年広大精神科入局後も当院で非常勤医師として薬物依存患者の臨床に携わり、法医学や薬学部にも出入りされて神経精神薬理学の研鑽を積まれ「シンナー中毒と脳内セロトニン受容体に関する研究」で学位を取得された。それ以来、先輩・後輩として精神医学・医療についてときには議論を交わして熱く語り、ときにはテニスや釣りなどでともに汗を流した関係でもある。

山脇教授が就任してから入局者は急増し、多くの広大医学部生が精神科医を希望し、活気にあふれた教室になった。他大学からも入局希望者はあとを絶たず、同門会員も100名弱から一気に300名を超える大教室へと発展した。新しいユニークなテーマで研究費をどんどん獲得され、多数の優秀な人材を輩出している。精神医学領域では、堀口淳教授(島根大)、西村良二教授(福岡大)、本橋伸高教授(山梨大)、サイコオソンコロジー領域では内富庸介部長(国立がんセンター)、保健医療学領域では岡村仁教授(広島大)、加賀谷有行教授(広島国際大学)、海外では林輝男部長(米国NIH/NIDA)などが活躍している。また、県内の関連病院に加えて、国立精神神経センター、国立がんセンター、名古屋市大、香川大、有明癌研などで山脇門下生が室長、准教授、部長として全国に名を馳せている。

山脇教授はわが国の精神医学のリーダーの人であり、国内の主要な学会の理事・評議員や数々の研究班の主任を務め、日本学術会議では精神医学を代表して連携会員となられている。多くの全国学会を主催してきたが、2010年には初代小沼教授、2代目更井教授に次いで広島の地で日本精神神経学会を主催される予定となっている。気分障害を中心とする数々の研究業績をNature, Neuroscienceをはじめ有名な国際雑誌に発表され、その成果は国際的にも高く評価されている。国際学会では、向精神薬の歴史とともに歩んできた国際神経精神薬理学会(CINP)の理事、事務局長を務め、2001年にはCINPアジア大会を成功に導かれた。また、国際老年精神薬理学会(ICGP)の創設に関わり、2006年には第6回大会を成功させられ、理事長に推挙されておられる。また、2008年に創設されたアジア神経精神薬理学会(AsCNP)の最初の理事長にも指名されるなど、その国際的活躍はすばらしい。

医局のスタッフもまた錚錚たる陣容である。森信繁准教授はうつ病やPTSDに関する分子薬理学研究で、岡本泰昌講師はうつ病の脳機能画



図3 宮島参拝 大願寺にて
左から三代目 山脇成人教授、小沼令夫人、初代 小沼十寸穂教授、筆者

像研究および認知行動療法で、山下英尚講師は睡眠障害や脳血管性うつ病の臨床研究で国内外の学会の特別講演、シンポジウムなどに招かれ、おののが全国区の研究者として高く評価されている。

また、昨今の経済優先の精神科医療施策にあって、山脇教授は優秀な精神科医を育成し、患者のニーズにあった機能分化を推進するためには、大学、精神科病院、診療所、総合病院精神科などが一体となり広島精神医療ネットワークを形成する必要性があると提唱され、新しい時代の精神医学・医療の広島モデルをめざして一丸となって取り組もうと着々と今その助走期間にある。

5 広島県精神科病院協会について

1. 広精協の独立とその後の活動について

昭和28年7月12日広島県精神病院協会(以下、広精協と略記)が広島精神衛生協会よりわずか9病院(初代会長 大林新)で分離し独立した。

広精協が発足して12年目にして「広島県精神病院協会誌」の創刊号が発刊(昭和40年9月20日)されている。

私宅監置こそ当時の精神障害者に対する国の大本の方針であったように思われ、それ故に呉先生の精神障害者に対する思いやりが前出

の“二重の不幸”という意見として発せられたものと推量されるが、こうした努力と経緯を経て戦後になりようやく昭和25（1950）年5月1日に“精神衛生法”が公布施行された。当然これにより精神病者監護法（明治33（1900）年制定）・精神病院法（大正8年（1919）年制定）は廃止されたのである。

当県において、この辺の激動の変革（昭和25年より約10年間）について、興味深い苦勞話“座談会”「精神衛生鑑定よもやま話」（昭和44年1月25日）が広精協の先輩達によって語られている（協会誌第3号）。

精神衛生法施行（昭和25年5月）当初より、精神鑑定に関係された県関係者、鑑定医の座談会であった。参加者は協会からは役員として故松田鎮雄会長（松田病院院長）、長尾邦雄副会長（現ほうゆう病院理事長）、天野友直理事（元天野病院院長）、宗近敬止理事（現宗近病院理事長）、故早川伴和理事（早川病院院長）と故三宅安三郎先生（養神館病院院長・県衛生部予防課の嘱託）、故馬屋原大輔先生（馬屋原病院院長）、故増田徳幸先生（比治山病院院長）、故児玉実先生（児玉病院理事長）の9名であった。

いくたの変遷があったが、当県における近代精神病院の草創期ともいえる時期に関係された体験を記録されている。当初の10年間は県の予防課が中軸となり鑑定が行われ、その後保健所単位となつた。

鑑定第1号は、昭和25年8月11日、小沼教授と三宅養神館病院長の二人で行った。当時は鑑定医2名が同行し、その場で鑑定し、収容は保健所が行っていた。印象として山間僻地に精神病者が多く、また交通事情も悪くて1日がかりで鑑定業務を行つたことも再三あったという。当時は自動車が珍しい時代で、県北に行くと、何か偉い人が来たように、住民のなかにお辞儀をする人がいたかと思うと、逆に反感を持たれて投石されたりした。多い時には一度に20件以上も役場などに患者が集まつたところで行つたり、オート三輪はまだ良い方で、大抵自転車

か徒歩で患者を訪ねたり、一度オート三輪で凸凹の山道を走らせていて谷に落ちたこともあつたという。

昭和28年頃に小沼先生がどういうわけか鑑定医を辞めるといわれ、鑑定医の親玉に辞められてはと、慌てたことがあるらしい。ちょうどその頃、精神衛生協会と精神病院協会がわかれた頃のことらしい。鑑定に行つたら、警察発行の私宅監置の許可証を堂々と提出されて、説得に困ったこと也有つた。当時の鑑定料は1回500円であった。

また、温泉旅館の息子の鑑定を行つたところ、旅館の親爺が「本当の精神病なら近くに“水打ちの滝”があり、これに打たれると治るのに、滝に入つても、うちの息子は治らぬから精神病ではない」と主張されて唖然としたこともあつた。指定病床数は昭和25年80床、昭和26年100床、昭和27年120床、昭和28年150床と増えた。昭和33年には200人以上の措置患者が収容されて、県が予算上困つて「精神障害者退院計画」を作つて、病院側に協力を求めて180人に抑えたこともあるという。

昭和25年厚生局（当時）の統計によると、広島県下の精神病者の数は非常に多く、ことに未収容の患者の数は全国第一位という状態にあつたという。私宅監置95件、非監置1,098件、合計1,193件とある。

このように当県においても、従来の私宅監置制度が昭和25年に廃止され、鑑定制度が採用されて、精神障害者は4施設の医療機関で医療と保護を受けることになり、精神衛生行政は飛躍的進展をみた。ようやく昭和30年頃より当県の精神病床は急増し、公私立合わせて32病院約5,000床に達している。この時の県内の精神障害者の推定は約29,400人（人口10,000人対12.9床）とある。また、県からの指導で以下のような4点の説明と指摘を受けている。

- ①措置入院患者の入退院の回転を早くすること
- ②火災を起こさぬこと
- ③著しい超過入院をさせぬこと

④クロールプロマジン使用基準の説明

◆昭和34年10月8日 日本精神科病院協会創立10周年記念にあわせて広島県精神病院協会総会を和歌山県、白浜温泉で行っている。

◆昭和37年11月9日・10日 第1回中国・四国精神保健学会

第1回の精神保健学会(看護師を主とするコ・メディカルスタッフ)が第16回中国・四国精神神経学会と併設して松山市で挙行された。このコ・メディカルを主とする保健学会の発足は記念すべきものであって、年々その参加数を増やしていく、次第に精神神経学会よりインディペンドとなるだけではなく、多職種の参加により、その参加数において、質量ともに急速な成長を遂げていった。ちなみに平成19年に、当県のホテルグランヴィア広島で行われた第31回中国・四国精神保健学会(会長津久江一郎)は314名(関係者含)の参加をみた。同日に第48回中国・四国精神神経学会(会長山脇成人教授)も行われた。

◆昭和44年9月 国公立、個人立計36施設6,000床。このうち広精協加盟病院26と民間病院が中軸となり、精神科医療を行っており、また常に10～15%の定床を越える入院で推移している。

◆平成15年12月10日 広精協創立50周年記念式典

広精協の現在の会員数は32病院7,948床となっている。歴代会長は初代故大林新先生(福山仁風荘病院院長)、故松田鎮雄先生(松田病院院長)、津久江一郎(瀬野川病院理事長)、そして石井知行先生(メープルヒル病院理事長)と受け継がれている。平成15(2003)年にはこれまでの先輩達の赫々たる努力により、創立50周年記念式典(会長津久江一郎)が開かれた。

北は北海道から、南は九州までの日本精神科病院協会の会員の先生方、河崎茂名誉会長、仙波恒雄会長、中国・四国地区代表の藤田英彦先生等多数がお祝いに馳せ参じて頂いた。

祝賀会の冒頭に、当協会の創刊号を編集して

いただいた安佐病院の理事長 檜山謙二先生とほうゆう病院の理事長 長尾邦雄先生に対して特別功労賞が授与された。特別記念講演は、国立保健医療科学院長の篠崎英夫先生(当県の公衆衛生課長(昭和52年)を振り出しとして、厚労省保健医療局長、健康局長、医政局長等を歴任)と国立精神・神経センター、精神保健研究所長の今田寛睦先生(大臣官房障害保健福祉部長、技術総括審議官等を歴任)の広島に縁のあるお二人にお願いした。特に今田先生は現在の広島県精神科病院協会長の石井知行先生と同級、同門であり、県病院、県精神保健センター長を経て厚生省に入省されご活躍された。

これら詳細については、「広島県精神病院協会誌」第11号創立50周年記念号として石井知行(現広精協会長)先生が編集責任者として平成17年3月に発刊されている。

2. 広精協の最近の活動(精神科医療体制の整備)など

ご存知のように精神科救急は一般科救急システムとは別に立ち上がった。

①当協会の民間病院のみによる電話相談体制

当協会として県医師会の行う当番医制とは別に昭和62年3月より専用電話によって、県内を東西2地域に分け輪番制で休日(日曜・祝日・振替休日・8月15日・12月31日・1月1～3日)の精神科救急案内を電話により会員のみの発意で発足した。

②措置入院者入院協力事業補助金

次いで、平成5年4月より当協会に対して救急業務を行う場合、措置入院とは無縁ではないので、過去1年間の実績を踏まえて毎年県・市より交付されている。

③精神科救急医療システム整備事業発足

そうこうするうちに全国的に精神科医療において救急の重要性が高まり、平成7年7月1日に厚生省保健医療局より「精神科救急医療システム整備事業の実施について」実施要綱が発せられた。

当県では民間病院のみによる広島県精神科病

院協会で全国で7番目に平成8年10月より実施した。(東部地区3病院、西部地区2病院の輪番により夜間・休日で行った。)救急システムを実施すれば、もう一つの重要な問題が浮かび上がった。「連れて来なさい。診てあげましょう。」ではこれはすでに救急とはいえない。救急システムを稼動すれば、必然的に往診・搬送する業務に迫られることがしばしば発生する。

そこで「措置入院・医療保護入院患者等搬送業務委託」を県・市とが各精神科救急輪番病院と契約し稼動している。

◆広島県精神科救急情報センター

次いで、平成13年4月1日より県・市より広島県精神病院協会に委託され、協会事務局に設置、24時間対応で稼動している。これは最近になって広島県精神神経科診療所協会(会長 清川育男先生)の先生方が当センターに夜間時の電話登録をするという協力を得て、さらに強化されることになった。

◆精神科救急医療センター(広島県・市委託)

重篤な身体合併症を有する精神障害者の場合、県内3つの精神科病床を有する総合病院を後送病院として県・市が契約を結び、全国で4番目に医療法人せのがわが認可(平成18年11月)され、いよいよ当県における365日・24時間常時対応するという精神科救急医療システムはますます充実してきた。

今一つ、平成13年8月初代小沼教授を記念して「KONUMA記念広島薬物依存研究所(所長 小沼杏坪先生(初代教授の御子息))」が医療法人せのがわに附設されて、アルコールを含む薬物依存に対する活動で広島を拠点として全国に多方面に亘り発信されており、伝統が脈々と受け継がれている。

その活動の一例として、平成17年度より毎年夏期には薬物乱用問題等指導者研修会を開催しており、毎回約100名の指導者研修を行なっている。また小沼所長を中心に日本精神科救急学会において「日本精神科救急ガイドライン(規制薬物関連精神障害)」を編集、総会にて提示し

た。第14回日本精神科救急学会(大会長 津久江一郎)を平成18(2006年)10月17日・18日・19日に初めて私立病院主催で広島国際会議場において開催し、参加者739名を得た。また、平成20(2008)年6月20日・21日にはANAクラウンプラザホテルにて、第30回日本アルコール関連問題学会(大会長 津久江一郎)を開催し、1,010名という多数の方々にご参加いただいた。両学会ともに小沼杏坪所長の大変な仕掛け、仕込み、努力、実行力があったことはいうまでもない。小沼十寸穂教授が発起人となり発足したアルコール関連の学会が当県で43年振りに実現、里帰りしたのである。

6 おわりに

以上、主として明治以降の郷土の精神科医療について述べた。それ以前についての歴史的足跡について言及することをあえて後に廻したことをお許しいただきたい。2つほど記してこれに代えたい。

1つは、江戸時代中期に今の広島市佐伯区湯来町にある湯の山温泉近くに岩壁の中腹から湧き出し落下する滝があり、この滝は“水打ちの滝”または“お滝さん”と称され、滝に打たれる療法が近年まで続き、精神障害者がその恩恵に浴していた。今では寂れているが、昔の風情は残っている。

もう一つは、文化5(1808)年に安芸国能美島大王沖美町岡大王(現広島県江田島市沖美町)の医師村上元伯の弟の医師一逕が安芸の宮内(現広島県廿日市市宮内)にある専念寺(眞宗)の養子となり、家伝の瘋癲病秘法の丸薬を造って施療を始めている。

この秘薬は、中国の原木(国内では長野県にあるという)を刻んで造ったと伝えられている。これを服用すると大量の大便を排泄して、鎮静効果があったとされている。一逕の子、文敬(浅野藩藩医)、その孫の敏惠にも秘法が伝授された。敏惠は長崎で蘭方を修めて明治33(1900)

年、同所で近代的な精神科として武田医院を開設している。以来、大正11（1922）年71歳で死亡するまで22年間その診療の実を挙げ、県外にも名が知られていたという。残念ながら昭和17年（1942）年に廃院となってしまった。

いずれにしろ、広島県においては前述したごとく、私立畠を終始歩き続けられた偉大な富士川游先生の気風が、慶應義塾大学出身の初代広島大学医学部神経精神医学教室小沼十寸穂名誉教授へと受け継がれ、現在の私的病院主導の当県の精神科医療システムが確立していった。また、それが広島大学医学部精神神経医科学教室第3代目山脇成人教授により学問的に裏打ちされ、両者が実に仲良く連携しながら今日に至っていると思われる。

いずれにしろ広島には長い歴史をもつ“医の伝統”を尊ぶ気運が脈々として今日まで続いている。

かくして大学精神医学と病院精神科医療がともに大きな転機にあることをそれぞれが銘記しながら、相携えて次の若き精神科医の人間育成という百年の計に向けて歩み続けているところである。

謝辞：この度の執筆にあたり貴重な資料をご示唆をいただいた原田康夫先生（財団法人広島市文化財団 常任顧問）、赤松和彦先生（メンタルクリニック赤松医院 院長）、石井和彦先生（養神館病院 理事院長）に対して心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 広島大学医学部神経精神医学教室：第62回日本

精神神経学会総会 1965

- 2) 赤松和彦：富士川游の広島に於る実践活動の一つ、養神協会のこと、広島市医師会だより、昭和50年9月号
- 3) 富士川游顕彰会：富士川游先生、1975
- 4) 安佐医師会：富士川游先生を偲んで、1976
- 5) 吳秀三先生顕彰会：吳秀三先生顕彰記念誌、1981
- 6) 岡田靖雄：吳秀三 その生涯と業績、思文閣出版、東京、1982
- 7) 江川義雄：廣島縣醫人傳、第1集 1986、第2集 1989、第3集、2002
- 8) 社團法人広島県精神保健協会：設立25周年記念誌、1994
- 9) 丘門会：丘門会会報 123、2000
- 10) 風祭 元ほか：松沢病院120年年表、星和書店、2001
- 11) 岡田靖雄：日本精神科医療史、医学書院、東京、2002
- 12) 松下正明ほか：司法精神医療、司法精神医学5、中山書店、2006
- 13) 広島大学医学部神経精神医学教室：小沼十寸穂教授開講20周年ならびに定年退官記念教室研究業績目録（昭和24年7月～昭和45年3月）
- 14) 広島大学医学部神経精神医学教室：教室開講30周年記念 広島大学医学部神経精神医学教室業績目録（昭和49年4月～昭和54年3月）
- 15) 広島大学医学部神経精神医学教室：教室開講40周年記念 更井啓介教授就任20年記念 広島大学医学部神経精神医学教室業績目録（昭和59年4月～平成元年3月）
- 16) 広島大学医学部神経精神医学講座 開講50周年記念 丘門会会報第122特別号
- 17) 広島県精神病院協会：広島県精神病院協会誌（創刊号～第11号）1965～2005

*

*

*